

中世ラテン騎士物語——カンブリア王メリアドクスの物語 目次

カンブリア王メリアドクスの物語に関するRの序文はじまる……………	7
カンブリア王メリアドクスの物語はじまる……………	8
〔訳註〕……………	97
訳者あとがき——解説にかえて……………	104
参考文献抄	
I. 校訂本抄……………	119
II. 欧文関連文献抄……………	119
III. 邦文関連文献抄……………	117

中世ラテン騎士物語——カンブリア王メリアドクスの物語

## カンブリア王メリアドクスの物語に関するRの序文はじまる

わたしはその文体がじつに高潔にして、機知に富んだ標題に飾られて、記憶に値する物語を書くことは価値があると考えた。よって、もしわたしがそれぞれの挿話を逐次ざっと述べたなら、蜂蜜の甘さを食傷ぎみに変えるだろう。したがって、わが読者の便宜をよく考えて、簡明な文体でこの物語を手短に語る決心をした。わたしは意味内容に欠けた、散漫な物語より、意味の通る簡潔な叙述が価値のあるものと信じている。

## カンブリア王メリアドクスの物語はじまる

アルトウールス王がブリタニア全土の王権を確保する前には、この島は三つの領域、すなわちカンブリア、アルバニア<sup>(3)</sup>とレグリア<sup>(4)</sup>に分かれていて、多くの諸王の支配下に置かれていた。そして、(運命の女神)は人間の諸般の事象を司るときに、これらの多くの人びとは時には彼らの支配権を手に入れた。<sup>(5)</sup>しかし、アルトウールス王の父ウーテル・ペンドラゴンの治世下には、カンブリア王国は彼らの父の死に際して二人の兄弟へ譲渡された。カラドクスという名の兄は王権を所有したが、弟のグリフィヌスは地方の一部の州を兄から任されて治めていた。カラドクス王の王国の都であり、彼がいつも住んでいたところはカンブリア人らがスナウドン<sup>(6)</sup>(スノードン)と呼ぶ雪に覆われた山の麓<sup>ふもと</sup>にあった。

しかし、このカラドクス王は莫大な富を有し、驚嘆すべき勇気を持ち、素晴らしい軍隊を指揮し、大艦隊を率いてヒベルニア<sup>(7)</sup>へ侵攻した。ヒベルニアの王が殺害されると、ヒベルニアを自分の支配下に屈服させて貢ぎ物を献上させた。この作戦が首尾よく完遂すると、カラドクスはヒベルニア王の娘を妻に娶った。こうしてカンブリアへ戻ると、彼女は双子の男の子と女の子を産んだ。カラドクスが

長い間王国を平穩に治めていると、年老いて時ならぬ老齡の重みに苦しむようになった。彼の疲弊した肉体の活力とその理知的な精神力は鈍麻していった。すると、これ以上王国の統治の任に当たる能力がなくなり、彼は全王国の防衛の監督を弟のグリフィヌスへ譲り渡した。カラドクス自身は狩獵やその他さまざまな娯樂に気ままに没頭して、彼は平穩と閑暇な生活により彼の老齡化を引き延ばした。しかし、グリフィヌスは自分に委ねられた王国の防衛を入念に遂行し、賢明に管理して、彼の兄カラドクス王の助言なくして何ごとも決定することはなかった。したがって、彼は兄から大きな信望を受け、カラドクス王は弟グリフィヌスに王国のすべての権限を委譲し、彼自身は王の称号だけを持つづけた。

しかし間もなく、悪い疫病がグリフィヌスのなかに広がり、彼の心を素早く犯罪へと押しやった。それゆえに、彼はそれだけ一層容易に、完全なる王権への欲望に汚染された。というのは、邪悪な心の人びと——彼の兄の平和を妬む人びとであれ、あるいは変化を求める人びとであれ、あるいは他の人びとの難局を自分の利益と恐らく計算する人びとであれ、彼らはグリフィヌスに賛同して、次のような言葉で兄殺しへ駆り立てたのである——。

彼らは言った。「今まで、われわれは閣下の昇任にじつに入念に関心をはらい、われわれは閣下を名譽の頂点へ掲げる務めを果たしてきましたので、閣下はご自身の上で指揮を執るあの老いぼれ（カラドクス）が、われわれを指揮するのはじつに不適切であると知るべきです。彼は今や殆どすべての

判断力の機能が奪われているのは周知の事実です。実際、閣下にとって、彼に威厳において後塵を拝すると受け取られるのは、最大の不名誉と見なすべきです。閣下は同じく輝かしい高貴な血統と、より優れた体力と知恵を有しているのが知られています。今や噂が広まって、彼はある外国の強力な男を娘の結婚相手として呼び寄せ、閣下に委託した王国の指揮権をその男に委ねたいと思つていると聞いています。もし彼が申し出た結婚の条件が首尾よくいけば、閣下は彼がしかるべき名誉を閣下から剝奪し、その上先祖伝来の財産をわれわれから没収するのを必ずや思い知るでしょう。というのは、王が彼の娘との結婚によつて前述の貴族の男と同盟したときは、欺瞞と奸計によつて、閣下は王国の統治から除外されるのは疑いありません。たとえ閣下がその男に対抗したくても、閣下の兄はこの男の援助で閣下の努力を打ち砕くでしょう。なにゆえに閣下はこの愚かな老人をこれ以上生かしておくのですか、それゆえわれわれ（貴族階級）と王国全土の状況が危機に瀕するのが明らかであるのにですか？ しかし、それには戦いなしで、ことがすむでしょうか？ 今は年端もいかぬが、確かな証拠により、カラドクスはやがては恐るべき勇敢さを發揮する養育中の息子がいないでしょうか？ その息子が成人に達したときに、彼の父親の元首の地位を自らに要求しないでしょうか？ もし彼が閣下の同意によりその王冠を獲得できなかつたら、閣下に逆らい力で戦いその王冠を強奪しようとしないうでしょうか？ こうして、市民の不和、内乱、市民の殺戮、祖国の荒廃が生ずるでしょう。したがって、その生存がわれわれに火急の危険と判断するあの男を冥界タルタルスへ送るよう命令してください。われわれ

貴族の全軍は閣下に服従するのをご覧ください。もし進言したことをせめて閣下が実行なさるならば、全王国の兵力は閣下の御意のままに動きます。

閣下は大いなる努力と強烈な支持なしでは、かかる任務を企てる能力も勇氣もないと申し開きなさらないように、御同意だけをお与えください。そうすれば、われわれはこの男の死について閣下には何の疑惑も生じないように、じつに巧妙にこの計画を遂行いたします。」

こういうや否や、彼らはあれやこれやの多くの欺瞞を働き、グリフィヌスの心を悩まし、ときには怯えさせて危機が迫っているかのように、またときには王国の魅力的な野望で彼を慰め、彼が兄の殺害に同意するように唆した。そのときから、彼らは提案した犯罪を遂行するためのふさわしい場所と時間を思案し始めた。そして、彼らは森へ狩りにいったカラドクスを仲間から引きはなして、奥深い森のなかで投槍を使い刺殺するのが良いと決定した。これを成就するため、その日の翌日が選ばれた。というのは、彼らはカラドクス王が狩りのため森へいく計画をしていたのを知ったからである。

実際に、カラドクス王が眠りに就いたまさにその夜に、彼は弟グリフィヌスが森のなかで自分を待ち伏せし、箆えびらから抜いた二本の矢を砥石とがしで熱心に研といている姿を夢にみた。それから、二人が近づいてきて、その二本の矢をグリフィヌスの手から受け取り、弓の弦はるを張り、思いがけず王を狙い発射したのだ。カラドクスはそれらの矢の一撃に驚き眠りから跳び上がった、実際に傷でも負ったかのよう  
に大声で叫んだ。



彼の異常な叫び声を聞いて、王妃は啞然として彼を両腕で抱え込み、彼の身体を揺すって、わが身を屈めながら、なぜかくも大きな声を発したのかと尋ねた。今でも恐怖に怯えながら、手の平を胸に押しあてながら、彼は夢に見たことを彼女に繰り返して話した。すると、彼女は未来を予言して言った。「陛下よ、ご注意なさいませ、陛下の弟グリフィヌスは陛下へ陰謀を企んでいるに相違ありませんから。なぜなら、弓矢は陰謀を予兆します。陛下は翌朝に狩りにいくことを決めましたので、森のなかに待ち伏せの場が用意されているのを知らねばなりません。したがって、今回は家に留まり、狩りの娯楽を後日まで延期することをお勧めします。」

この忠告に対して、王は答えた。「そのようなことをいうのをやめなさい。余が今までつねに愛して、じつに多くの偉大な恩恵を与えてきたわが弟が余に死の危機を企てることなどを決して信じたくはない。」

したがって、彼は王妃の忠告に従うことを拒否し、夜明けとともに、運命が命ずるままに狩りをするため森へ出発したのである。しかし、彼の実の弟グリフィヌスは実際に屈強で勇敢ではあるが、習性の邪悪で狂暴であり、流血沙汰を好む二人の貴族を選んで、彼らに決定した恥ずべき行為を成就することを委ねた。そして、彼は彼らをカンブリアの最高位の貴族にする約束をした。したがって、王家の一族が獵犬を放って、現れた獲物を追跡している間に、狩りの場合にはよくあるように、彼らは競って別々の方向へ逸れてしまった。カラドクス王は老衰のため追跡できずに、唯一人置き去りにさ

れて、彼には死が迫っていた。

近くの繁茂する低木のなかに身を潜めていた二人の悪人らは、直ちに飛び出してきて、王を森の薄暗い隠れ場へさらに遠く引きつれていき、狩りの矢で王を刺して殺害した。

そして、彼らは王の傷に矢を残してその場を急いで立ち去った。それは陰謀者の謀略によるよりも、誰か狩人の偶然により起こったと信じてもらうためであった。

しかし、かくも偉大な人の死はそう長く隠すことはできなかった。というのは、直ちに、今なお血も温かい王の死体は森を歩き廻る狩人らによつて発見された。大きな叫び声と騒乱と動揺が湧き起つて、角笛の合図で狩人らの一行が呼び戻された。残酷にも血の振りかかった王の屍は王宮の中央に運び込まれた。その哀れな光景は皆の涙と哀憐の情を誘った。この大罪の実行者らが捜査されたが、その疑惑を持たれる人は誰もいなかった。真実を知るのが困難に思われた。近隣の城市まちを通してカラドクス王が森のなかで狩猟の最中に待ち伏せされて残酷に殺害されたという噂が広まった。すべての人びとは嘆息し、王のために絶えず悲しみ溜め息を漏らした。そして、涙を流しながら、王が生きている間、彼らはこの王にいかにも深い愛情を抱いていたか、その証拠を示したのである。

しかし、これらのことが起こっている間に、王妃は夫から話された夢のため、真実を過剰に推測して、彼女の寝室に閉じこもり、とめどなく涙を流し苦悩していた。彼女は王の殺害を知ると、その葬儀を遠くからじっと見つめて、堪え難い悲哀に捉われ、戦慄していた。そして、彼女の心はあまりの

## 訳者

瀬谷 幸男 (せや・ゆきお)

1942年福島県生まれ。1964年慶應義塾大文学部英文科卒業、1968年同大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了。1979～1980年オックスフォード大学留学。武蔵大学、慶應義塾大学各兼任講師、北里大学教授など歴任。現在は主として、中世ラテン文学の研究、翻訳に携わる。主な訳書にA. カペルラヌス『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛術指南の書—』(南雲堂、1993)、『完訳 ケンブリッジ歌謡集—中世ラテン詞華集—』(1997)、ロタリオ・デイ・セニ『人間の悲惨な境遇について』(1999)、G. チョーサー『中世英語版 薔薇物語』(2001)、ガルテース・デ・カステリオネ『アレクサンドロス大王の歌—中世ラテン叙事詩』(2005)、W. マップ他『ジャンキンの悪妻の書—中世アンティフェミニズム文学伝統』(2006)、ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史—アーサー王ロマンズ原拠の書』(2007)、『放浪学僧の歌—中世ラテン俗謡集』(2009)、ジェフリー・オヴ・モンマス『マーリンの生涯—中世ラテン叙事詩』(2009)(以上、南雲堂フェニックス)、P. ドロンケ『中世ラテンとヨーロッパ恋愛抒情詩の起源』(監・訳、2012)、W. マップ『宮廷人の閑話—中世ラテン綺譚集』(2014)、『シチリア派恋愛抒情詩選—中世イタリア詞華集』(2015)『中世ラテン騎士物語—アーサーの甥ガウエインの成長記』『完訳 中世イタリア民間説話集』(2016)、ジョヴァンニ・ボッカッチョ『名婦列伝』(2017)(以上、論創社)がある。また、S. カンドウ『羅和字典』の復刻監修・解説(南雲堂フェニックス、1995)、その他がある。

## 中世ラテン騎士物語 カンブリア王メリアドクスの物語

---

2019年5月10日 初版第1刷印刷

2019年5月20日 初版第1刷発行

訳者 瀬谷 幸男

発行者 森下 紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1812-2 ©2019 Printed in Japan